耳鼻咽喉科学校健診結果と全国定点検査との比較

札幌市学校医協議会
新谷　朋子、高木摂夫、佐野宏行、堂坂善弘　成田愼一郎　愛宕義浩　打田葉子

はじめに

学校健診における耳鼻咽喉科健診は学校における健康診断の一環として実施されている。健康の保持増進を目的とした健康状態の把握が中心で、健康上の問題や疾病の疑いがないかをスクリーニングする「健康診断」であり「検診」ではない。学校保健安全法施行規則第３条に、健康診断の方法および技術的基準が記されており、その７項に、「耳鼻咽頭疾患の有無は、耳疾患、鼻・副鼻腔疾患、口腔咽喉頭疾患および音声言語異常等に注意する」と記載されており、耳鼻咽喉科健診はこれに基づいて行われている。耳鼻咽喉科健康診断の実施には、平成28年（2016）に日本耳鼻咽喉科学会学校保健委員会が作成した「耳鼻咽喉科健康診断マニュアル」[1)]があり、日本耳鼻咽喉科学会ホームページからもダウンロードが可能である。また、日本学校保健会の「児童生徒等の健康診断マニュアル」内にも学校健診における耳鼻咽喉科疾患について記載されている[2)]。

札幌市は小学生は１年生と４年生、中学生は１年生に毎年４－６月の間に担当の耳鼻咽喉科学校医が健診を行っている。学校健診のデータは平成18年度以降、教育委員会が窓口となったことからデータの回収率が改善され、その結果の提供を受けて札幌市耳鼻咽喉科医会が集計して毎年札耳会報で報告している。本稿では平成30年度に行われた学校健診の結果を報告する。また、日本耳鼻咽喉科学会学校保健委員会では耳鼻咽喉科健康診断結果の統計的推移を把握するため平成28年度から５年間にわたって全国各地に定点を設定して健康診断結果の疾患別調査を行うことになり、北海道では札幌市と旭川市が本調査に参加している。有所見者数の多い滲出性中耳炎、副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎について同じく平成30年度の定点調査の全国調査[3)]との比較を行った。

平成30年度の札幌市の耳鼻咽喉科健診結果

健診対象者は小学１年生在籍者12,468人のうち受診者は12,230人（男6,131人、女6,099人）、小学４年生の在籍者12,887人のうち受診者は12,659人（男6,365人、女6,294人）、中学１年生12,577人のうち受診者12,305人（男6,309人、女5,996人）であった。有所見者人数は小学１年生3,171人（26.0％）、男1,718人（28.0％）、女1,453人（23.8％）、小学４年生2,443人（19.3％）、男1,422人（22.3％）、女1,021人（16.2％）、中学１年生2,183人（17.7％）、男1,277人（20.2％）、女906人（15.1％）で低学年、男児の割合が高かった。

１．耳疾患

耳垢栓塞が小学１年生1,345人（10.8％）、小学４年生883人（7.0％）、中学１年生756人（6.1％）と低学年に多くみられた。滲出性中耳炎は小学１年生130人（1.1％）、男69人（1.1％）、女61人（1.0％）、小学４年生44人（0.3％）、男23人（0.4％）女21人（0.3％）、中学１年生25人（0.2％）、男15人（0.2％）女10人（0.2％）で同様に低学年に多かったが男女差はなかった。難聴は小学１年生39人（0.3％）、男13人（0.2％）、女26人（0.4％）、小学４年生353人（2.8％）、男162人（2.5％）、女191人（3.0％）、中学１年生42人（0.3％）、男22人（0.3％）女20人（0.3％）で特に年齢による差はなく0.2-0.4％にみられた。

２．鼻疾患

副鼻腔炎は小学１年生517人（4.2％）、男300人（4.9％）、女217人（3.6％）、小学４年生256人（2.0％）、男158人（2.5％）、女98人（1.6％）、中学１年生120人（1.0％）、男74人（1.2％）、女46人（0.8％）で低学年に多く見られ、いずれの学年も男児の有所見者の割合が高かった。アレルギー性鼻炎は小学１年生783人(6.4％)、男487人（7.9％）女296人（4.9％）、小学４年生1,060人（8.4％）、男675人（10.6％）、女385人（6.1％）と学年が上がるごとに有所見者数が増えており、男児の割合が高かった。

３．口腔疾患

扁桃肥大は小学１年生178人（1.5％）、男98人（1.6％）、女80人（1.3％）、小学４年生84人（0.7％）、男43人（0.7％）、女41人（0.7％）、中学１年生59人（0.5％）、男37人（0.6％）、女22人（0.4％）で、低学年の方が有所見率が高かったが、男女差は見られなかった。

音声および言語異常は小学１年生13人（0.1％）、男10人（0.2％）、女３人（0.1％）、小学４年生12人（0.1％）、男１人（0.02％）、女11人（0.2％）、中学１年生２人（0.02％）、男２人（0.03％）、女０人（０％）で低学年に少数みられた。

以上、有所見者数、副鼻腔炎は低学年、男児の割合が高く、アレルギー性鼻炎は男児に多かったが逆に高学年になるほど有所見者の割合が高かった。耳垢栓塞、扁桃肥大は男女差はないが低学年に多く、難聴は0.2-

0.4%、音声言語異常は0.1%以下であった。

耳鼻科健診の意義は小児期に認められるさまざまな耳鼻科領域の異常のスクリーニングである。平成６年に学校保健法施行規則が改正され、学校健診でスクリーニングされる疾患が従来は「耳疾の有無は、特に耳垢栓塞および中耳炎に注意する」、「鼻および咽頭の疾患の有無は、鼻炎、鼻たけ、副鼻腔炎、鼻咽頭炎、鼻中隔彎曲症、アデノイド、扁桃肥大、扁桃炎、音声言語異常等に注意する」と具体的に記載されていたのが、「耳鼻咽頭疾患の有無は、耳疾患、鼻・副鼻腔疾患、口腔咽喉頭疾患および音声言語異常等に注意する」と改められた。各年齢で約15-25%に何らかの所見が見られることによりスクリーニングとしての健診の必要性が確認された。

平成30年度の全国定点調査報告と札幌市の耳鼻咽喉科健診結果の比較

日本耳鼻咽喉科学会学校保健委員会は昨今の学校保健を取り巻く環境や社会情勢の変化を鑑み、耳鼻咽喉科診断結果の統計的推移を把握するため、平成28年度から５年間にわたって全国各地に定点を設定して健康診断結果の疾患別調査を行っている。平成30年度は23都道府県、80市町村に定点を設定して健康診断結果の疾患別調査を行った[3)]。北海道では札幌市と旭川市が本調査に参加している。今回有所見者数の多い滲出性中耳炎、副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎について平成30年度の札幌市の健診結果と定点調査の全国調査[3)]を下表にまとめて比較を行った。全国の小学１年生の受験者は114,175人（男58,457人、女55,718人）、小学４年生は90,103人（男46,342人、女43,761人）、中学１年生は92,101人（男47,172人、女44,929人）であった。

	滲出性中耳炎		副鼻腔炎		アレルギー性鼻炎	
人（%）	札幌市	全国定点	札幌市	全国定点	札幌市	全国定点
小学１年男	69（1.1）	655（1.1）	300（4.9）	1,951（3.3）	487（7.9）	5,750（9.8）
小学１年女	61（1.0）	46（0.8）	217（3.6）	1,238（2.2）	296（4.9）	3,235（5.8）
小学１年全員	130（1.1）	1,123（1.0）	517（4.2）	3,189（2.8）	783（6.4）	8,985（8.9）
小学４年男	23（0.4）	161（0.4）	158（2.5）	713（1.5）	675(10.6)	5,856(12.6)
小学４年女	21（0.3）	123（0.3）	98（1.6）	402（0.9）	385（6.1）	3,394（7.3）
小学４年全員	44（0.4）	284（0.3）	256（2.0）	1,115（1.2）	1,060（8.4）	9,250(10.3)
中学１年男	15（0.2）	73（0.2）	74（1.2）	455（1.1）	622(10.0)	626(15.2)
中学１年女	10（0.2）	59（0.1）	46（0.8）	227（0.5）	406（6.8）	3,936（8.8）
中学１年全員	25（0.2）	132（0.2）	120（1.0）	682（0.8）	1,028（8.4）	1,020(11.9)

１）滲出性中耳炎

札幌、全国定点調査のいずれも低学年の有所見者数が多く小学１年生は0.8-1.1%、小学４年生が0.3-0.4%、中学１年生が0.1-0.2%で、男女差はなかった。一般には滲出性中耳炎の有病率は諸家の報告によると、６歳から８歳では３－９%、９歳では０－６%と言われているので低学年の耳鼻科健診は重要と思われた。

２）副鼻腔炎

札幌市、定点調査のいずれも低学年の男児の有所見率が高かったが、札幌の罹患率が高いことが示された。副鼻腔炎は減少傾向で小児の有病率は３－４%と言われている。

３）アレルギー性鼻炎

高学年になるほど有所見率が高くなっていたが、いずれの年代も全国定点調査の有所見率が高く男児に多くみられた。

以上、低学年では耳垢栓塞、中耳炎や、副鼻腔炎の罹患についてのチェックがより重要であるが、学年が上がるごとに増え続けるアレルギー性鼻炎の高い有所見率から原因抗原の検索と予防、治療の必要性と児童や保護者への啓蒙が重要と思われた。

文献

１）平成28年（2016）に日本耳鼻咽喉科学会学校保健委員会が作成した「耳鼻咽喉科健康診断マニュアル」
２）日本学校保健会の「児童生徒等の健康診断マニュアル」
日本耳鼻咽喉科学会学校保険委員会：耳鼻咽喉科健康診断の全国定点調査、日耳鼻　108: 823-834, 2005
３）朝比奈紀彦　平成30年度耳鼻咽喉科健康診断全国定点調査結果について、耳鼻咽喉科学校保健の動向、平成31年１月、日本耳鼻咽喉科学会学校保健委員会、28-39